

## 不登校との出会い

田中 祐次

(新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター教育臨床研究部門)

日 時：平成 15 年 3 月 1 日 (土) 13:10～14:00

場 所：新潟大学教育人間科学部 204 講義室

### 講師紹介

担当：松井賢二・助教授（教育臨床研究部門）

田中先生の紹介を松井のほうからさせていただきます。

田中祐次先生は昭和 13 年、1938 年 1 月に東京都墨田区でお生まれになられ、現在 65 歳でいらっしゃいます。

昭和 32 年に日比谷高等学校、昭和 38 年に東京学芸大学学芸学部初等教員養成課程教育心理科を卒業なされ、昭和 40 年には東京教育大学、現在の筑波大学、そちらの大学院教育学研究科にご入学、そして文学修士の学位を取得された後に、博士課程に進まれましたけれども、昭和 41 年、信州大学に就職のため中退をなされました。

その信州大学の助教授のときに文部省在外研究員として、アメリカのスタンフォード大学とイリノイ州立大学におかれましてご研究に励まれました。

帰国後、昭和 55 年文教大学に教授として迎えられ、12 年後の平成 4 年、鳴門教育大学に移られました。そして平成 10 年からは大学院教授として博士課程をご担当されました。さらに平成 11 年、新潟大学にいられて、平成 13 年の教育実践総合センターの発足に伴って配置換えとなられ、新しく新設された教育臨床研究部門の初代教授に着任されました。

平成 13 年からは当学部の附属養護学校の校長先生に選出され、現在も引き続きされておられます。

以上のような 37 年間にわたって、ご専門は集団心理学、あるいは人間関係心理学でございますけれども、その間著書 33 編、事典 11 編、論文 32 本、その他啓発論文 57 編等を著されまして、専門的なご研究を深めてこられました。

また社会におきましては、家庭裁判所家事調停員をはじめ、新潟県のスクールカウンセラー、あるいは新潟県教育委員会不登校対応評価検討委員会の委員長など、先生のご専門を生かされた諸活動にも精力的に取り組まれ、大きく社会貢献をされてこられました。

さらには、15 個にもわたる学会に所属され、学会活動にもご尽力なされ、平成 9 年には日本カウンセリング学会から功労賞を授与されておられます。

最後に、田中祐次先生のお人柄にも少しだけふれさせていただきたいと思っておりますけれども、それを端的に表している文章がございます。それは附属養護学校の「すなやま」という広報誌に校長先生として執筆された中に、「人にとっての基礎基本」という中の一文を引用させていただきますと思います。

「人は人々の世界で暮らしています。他の人たちと一緒に助け合いながら暮らしています。私はそれで『人が生きていく上で一番必要なことは人と交わる技術』ではないかと考えます。」

という一文がその「すなやま」の中にごございますけれども、まさしくここに書かれておられますことを、私たち職員に対してもそうですし、また大学院生、あるいは学部の学生に対しても、御みずから身をもって私たちに示してくださったのではないかなというふうに思っております。

常に人に対して「身を低くして、他の人たちと和合・協力」して、一つひとつのお仕事をなされてこられたんだというふうに、私も身近に感じているところでございます。

その先生が退官なされることは非常にさびしいことでありますけれども、37 年間という教育・研究生活を無事にまっとうされたということは本当に心からお喜び申し上げます。

簡単ではございますけれども田中祐次先生のこれからのご多幸を祈念いたしまして、ご紹介を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

田中祐次教授 最終講義

はじめに

皆さん、こんなに大勢お集まりいただきましてありがとうございます。ただいま、大変身に余るご紹介をいただきまして、なんと私は気恥ずかしい気持ちでいっぱいでございます。

最初にちょっとお詫びをしなければならぬんですが、

私この1週間、久しぶりに寝こんでいました。きょうやっと咳がとまってきました、この調子ならなんとかお話ができるかなと思っています。昨日お医者さんから「多少無理しても大丈夫です」というお墨付きをくださいましたので、普段のような大声の講義はできないかもしれませんが、お許しください。

本日は宣伝チラシによりますと、私の退官を記念したシンポジウムだとの見出しになっていたりして、私としましては、本当に恐縮の限りでございます。私もこれまで、「やはり最終的には自分の研究テーマというのは不登校をいかにして無くすかということだったんだな」ということをつくづく認識しまして、なんだったら、これをきっかけにかねがね話になっている不登校の学会を発足させるのはどうなんだろうと思っていました。ただ、急にそうはいつでも私の力では難しいので、実践センターの全国協議会の中に臨床部門がありまして、その先生方とは毎年話し合いをしているわけでして、この機会をむしろそちらのことに使っていただければと思っていました。それできょうは中野先生はじめ、主要な面々にお集まりいただきまして、その準備やきっかけにでもなっていたらいいんじゃないかという私の申し出を、皆さん大変率直に受け取ってくださいまして、私としては本当に身に余る記念の日になるような気がしております。本当にありがとうございます。

今日のテーマが「不登校問題の現状とこれからの課題」ということになっております。これが本題だというふうに思います。私、1時間時間をいただいておりますけれども、こんな状態ですのどのぐらい続くかわかりません。あとのシンポジウムのほうにむしろ重点がございますので、私のほうは早めに切り上げさせていただくかもしれません。

それで前座といたしまして私の「不登校との出会い」ということで、むしろ37年前にさかのぼって、少し昔話をさせていたどうかと思います。皆様のお手元に簡単なレジュメを用意させていただきました。

#### 1. 疎開地の思い出

- 私も不登校をやりました -

かれこれ58年ぐらい前の話になってしまいますけれども、実は私も不登校をしていたときがあったなあということをつくづく思い出しました。私としては別に学校へ行きたくなかったわけではなかったんですけども、諸般の事情でそうってしまったんです。不登校児童の立場から一つだけヒントになることがあるかなということ添えて、まずそのところから話をさせていただこうと思っています。

す。

ただいま、松井先生からご紹介いただきましたように、私の略歴のところにも添えさせていただいたんですが、東京大空襲で私は父親を亡くしました。当時まだ母親は34、5歳だったと思いますけれども、4人の子どもを抱えまして、私はきょうだいの2番目で次男で本来なら2年生でした。兄は小学校の5年生だったかと思います。集団疎開に行っていましたかたまたま戻ってきていました。私たちが生き残ったのは、当時は東京の郊外だった葛飾区柴又に引っ越していたからでした。もうすでに空襲が激しくなってきた、家を空き家にするわけにはいなくなってきておりまして、父親だけが一人で東京の本所の家で留守を守り、徴用で勤務を命じられた工場へ行っていました。

そういうことで幸い私たち兄弟と母親は生き残ったわけでございますけれども、柴又というところは、戦後は寅さんで有名なところになりましたが、そこは米軍(敵)の爆撃機B29が東京で爆弾を落とし、急いで急上昇して逃げていく場所で、残りの爆弾や焼夷弾を全部一気にばら撒いていくわけです。急上昇しないと江戸川の近くにあった高射砲でねられるからでもありました。そこはけっこう優秀な高射砲だったらしくて、敵の飛行機はそれを避けるために急上昇をする必要があったわけです。そのため毎日毎日、爆弾と焼夷弾をあびせられるような所でした。ただ、当時は今のように建て込んでいる所ではなくて、田んぼの中の一軒屋みたいな感じでしたが、たまたま運悪く直撃を受ける家もありました。そんな中で爆弾が落ちてくる音を聞くと身が震える思いをしながら、防空壕で身を縮めていたんです。爆弾が落ちてくる音が聞こえ、やがてズズーンとくると、「ああ助かった」という感じを今でも覚えております。

そんな所だったものですから怖くなりまして、親戚を頼って茨城県の今という水海道へ移りました。そこは町なんですけど、私たちが住むことになったのは、町のはずれに鬼怒川という川が流れておりまして、そのまた向こうの在(ざい)といわれるところでした。小学校は1時間ぐらい歩かなければならなかったんですね。兄はなんとか通ったんですけど、わたくしは都会育ちですから歩くのが大変なんですね。また兄から「東京っ子はいじめられるんだ」と聞かされて怖かったということもありました。

母親がどういう見通しだったのか、多分そのうちに戦争は日本が負けて終わるからということだったんだと思うんですけども、「学校へ行かなくていい」と言ったんですね。それで私は気が楽になりました。しかし皆さんの参考になると思うのは、兄が学校へ行ってしまうと私が一番上で下にまだ妹と弟がおりましたので、その面倒を見なければならぬ。私と兄で2人で学校へ行くとお母さん

が大変だろう、そういう思いが確かにあったように思います。また、母親としても私は手伝いをさせるにはちょうどよい年頃で、多少気持ちの上で頼りになっていたのではと思います。それで1年間学校へ行きませんでした。最初行かなくなりまして途中で行くという気もおきなくなりました。ちょうどそこへ住むようになったのが、本来なら2年生として進学していく春だったんですけれども、陽気もよくて、母親が親戚の畑の手伝いをする。私も一緒になって手伝いをする。小学校の2年生で、私は早生まれですから7歳になったばかりではあったわけですが、確かに何かしら役に立つんですね。

その後、だんだん様子が変わってきまして、私はむしろ逆にあちこち食い減らしのために預けられるようになりました。そんなことで、とうとう1年間学校へ行かなかったんですけれども、その間何をやったかという、春夏秋冬という田舎の暮らしを満喫したんです。

春は田んぼの蛭(ひる)が怖かったので泥沼に足を突っ込むのが怖くて田植えはしませんでしたけれども、ザリガニ捕りやちょうちょを追いかけるとか、そういうことをさんざんやりました。夏になるとせみ捕り、とんぼ捕り、それはかなり腕を上げました。秋になると塀から飛び出しているクリの木のクリを、そこの家の人に見つかりますと叱られますからこっそりとったりして、いろいろ楽しんだと思います。冬は新潟では皆さんあまり経験しないそうですけれども、麦踏というのもしました。またご年配の方は覚えていらっしゃるかもしれませんが、当時は畑の肥料に人糞を使っていましたから、兄と一緒に肥料を肥溜めからひしゃくですくって大根畑に撒いたりとか、そんなことをやりました。

私にとっては大変良い、貴重な経験になっておりまして、その後、最初に勤めた信州にしましても、徳島でも、この新潟にしても、田舎を回っていきましたが、田舎というのは失礼ですけれども、地方を回っていたのはどこかにそのときの思いが原点になっているようで、都会暮らしをしていてもいつも田舎の自然や季節の情景が頭の中にあるという、そういうことでございました。

大してご参考になるわけではありませんけれども、一つは母親一人だったものですから、子ども心に母親を気遣っていたということがあったかということ、もう一つは母親自身頼りがいがあったのではないかということです。最近の不登校の子たちを見ますと、低学年などにはそういうのがよくあるものですから、自分ももしかしたらそういうものがあつたような気になるのかもしれませんが。

しかし1年間の不登校時代というのは全く戦争がきっかけでして、私はそのために、東京へ戻ってまた2年生をやり直すということになりましたが、気後れするような感

じはなく、むしろ「さあ、学校が始まるぞ」という気でいたように思い返されます。しかし同年齢のものより1学年遅れておりまして、年齢的には同学年の仲間より1歳年をとっております。

そんな子ども時代の経験がありますが、戦後になって東京の小学校に戻ってから、実はこれも暇ができたならもう1回探してみようかなと思っておりますけれども、確か小学館の小学2年生という雑誌だったと思いますが「疎開地の思い出」というのを書かまして、賞として1年間雑誌をただでもらった覚えがあります。母親としては苦勞の時代だったと思いますけれども、私はけっこうその1年間を楽しんだともいえるわけで、あとの勉強にもあまりさしつかえなかったようにも思っております。今でも学校1年ぐら行かなくても別にどうってことないという、そういう安易な気持ちも若干あります。

不登校というのもいろんな運命的なことで起きる面もあるかと思えます。特に小学校の低学年の不登校がこのごろ増えてきていると私自身も感じますが、その中には生まれてきた家庭に何か運命的なことが起きてきて、子どもがそれに巻き込まれているということもあるのではないかなと思っております。

大してご参考にならなかったかもしれませんが、ただ、私にとりまして、父親を戦争で失ったということは常に私の人生の原点にあります。私の講義では必ずどこかで戦争体験の話をしていただいております。私が大学を去るということは、戦争体験を語れる教師が一人また少なくなるんじゃないかなという思いでございます。その点よろしくお引継ぎいただければありがたいと思っております。

## 2. 田中熊次郎先生との出会い

いよいよ大学に入るわけですが、大学に入って私がやったのがここに挙げてあります田中熊次郎先生とのことです。この1月にもお伺いをしましたけれども、今は93歳です。昨年の暮れに体調を崩されて少し元気がなくなっておられましたけれども、だんだん話が弾んできますといつものような元気な声になってきて、私はそばでちょっとはらはらしました。若いころ私は行くのが苦になることがよくあつたんですね。それは行ったら最後1日確実に時間が費やされるんです。お話好きの方で、3時間ぐらいはへっちゃらでいろいろお話をしてくださるわけです。それが途切れないものですから、お手洗いへ行くこともできないくらいなんです。最近では私は本当に貴重なお話だと思って伺っておりますが、今回行ったときはさすが1時間ぐらいでくたびれたようなご様子でしたので、「またまいります」といって辞してききました。大変お話し好きで、講演

にお呼びしても、司会のほうから1時間半というふうに制約を受けていながら、2時間たっても終わらないということで、いつも司会の方は苦勞なさっていました。

この先生から私はソシオメトリーを学びました。それからその創始者であるモレノという学者のことを学びました。ただ残念ながら私はほとんど先生からの耳学問だったんですね。その中で一番印象に残っていることがあります。当時私が大学に入った年は60年安保の前の年でしたので、入学する早々学生運動が活発になって、日夜クラス討論の連続でした。そういうときでしたから、もちろん、当時ソ連とアメリカの二極対立の中で日本はもまれていたわけですが、我々もそのはざまでもまれておりました。私も若かったですから、共産主義についてもずいぶん勉強しました。そういう中で、若い人はあまり耳にしない言葉かもしれませんが、プロレタリアート、ブルジョアという二つの対立、金持ちと貧乏人といってもいいわけですが、世の中には経済格差として二つの階層がある。マルクスはそれを革命によって経済を平等化するんだと共産革命を行ったわけですが、モレノはそれをこういうふう引用しているんですね。「マルクスは経済の平等を説いた。しかし経済の平等だけで人間の幸福はありえない。人間が本当に幸福になるためには、愛の平等がなければならない。世の中には愛のブルジョアジーと愛のプロレタリアートがいる。」

ソシオメトリック・テストでいきますと、いわゆる人気者になるようなものというのは、みんなから愛をもらっている愛のブルジョアジーだと。それに対してみんなから選択をもらえない、むしろ排斥をもらってしまうようなそういう子どもたちがいるけれども、それは愛という点からするとプロレタリアートに匹敵するんだ。モレノは愛のブルジョアと愛のプロレタリアートを愛の格差をなくすことを目的として、いわゆる社会の改革をねらっているんだという話を聞きました。

経済の革命というのはさかんに進行している時代でしたが、確かに経済の平等は第一かもしれないけれども、それが達成されたときにみんなが本当に幸せになるのだろうか。それに対しては大変疑問を持っておりましたので、その両方が必要なんだという立場を私なりに受け入れました。それで私としては、学校の教師になって、愛においてプロレタリアートであるような、そういう子どもを少しでもなくしていく、そういうことを私としては理想としたわけでございます。

### 3. 大学院時代のこと

幸か不幸か、私が学生を終えて小学校に勤めようと思っ

たときには、東京都の採用がほとんどありませんで、私は就職する口が出るまでしばらく留年でもして待っていようかという気持ちにもなりました。私の友人の中には鳥とか山間僻地のほうに行った者もおりますけれども、私はそれほど勇気がなかったものですから、そのうちにということで待機することにしました。

そんなことを考えて専攻科へ入りたいと申し出たところ、田中熊次郎先生が大学院というところもあるぞと。私はそのときに初めて大学院というものを知ったんですけども、いずれにしても専攻科の試験を受けなければならぬし、どうせ試験を受けるんだったら少し高望みしてみようかと思って、大学院を受験することしました。大学院といっても当時東京学芸大学ではなく東京教育大学の大学院のことで、かなりたじろぎましたが、幸い入学を認められ2年間を過ごしました。それでもまだ教員になる夢は捨てなかったんです。でも、いろいろ事情がありまして、博士課程まで進みましてその途中で、信州大学で助手の口があるといわれました。信州ならば教育熱心なところだし、またなにかチャンスがあるかもしれないということで、とりあえず足を踏み入れたんですが、大学というところは大変居心地がいい所でした。研究がだんだん楽しくなってきましたむしろ学校現場と一緒に子どもたちのための研究できたらと思うようになりました。最近はそのいつてはなんですけれども大学も現場もちょっと居心地が悪くなっているような感じがいたします。

というのは、まず比較してみると、最近の大学の先生方は非常に真面目で、サラリーマンといったら失礼になるかもしれないんですけども、きちっとお勤めをする。また会議にもちゃんと出る。私が初めて教師になって大学に勤めたころは、大学というのは変人の集まりかというふうに思いました。でも私は変人といわれるような人の存在が許されるというところはなかなか良いところだと思っていました。そういう変わった人たちは一般社会ではとても生活できないかもしれませんが、天才と馬鹿は紙一重ともいわれますので、この人たちは天才なんだろうなと思いつつながら、そういう人たちがいられる社会はいいな。私もむしろ安心して仕事をしていられる、そんな気がしておりました。

話を戻しまして、モレノに関しましては、信州大学にいるときには心理学科の図書室にこれ(Who Shall Survive?)がありまして、今でもあると思いますけれども、竹内硬先生がたぶん購入されたと思います。私の尊敬する先生の1人です。モレノが「Sociometry」という雑誌を創刊したのが確か1937年、私が生まれたころだというふうに覚えています。「誰が生き残るか」という題目ですけども、この題名いいじゃないですか。私はこの題名にも惹

かれました。これは1930年代よりもむしろ今にぴったりの題目ではないかと思えます。この翻訳はいまだに出ておりません。

私自身、この原著を自分のものとして手に入れたのは数年前で、そういうのを探してくれる本屋さんがこのごろありまして、そこで見つけてもらってやっと手に入れた私の宝物です。正直いって全部よんでいるわけではなくてただ持っているだけです。これから少し時間ができたらじっくりと読んでみようかなと思っております。ここにソシオメトリーも紹介されております。

話を先へ進めますけれども、モレノはむしろこの著書とかソシオメトリーより皆さんはサイコドラマの創始者としてご存知だろうと思えます。そんな話も当時田中熊次郎先生から聞かされておりました、田中熊次郎先生自身、ソシオドラマを学級で指導したりもしておられました。

私は4月から大学院に入ったんですが、確かその秋、10月か11月に田中熊次郎先生はまだ当時東京学芸大学におられたわけですが、そのとき、東京教育大学に教育相談施設が文部省から認可を受けて予算がつくようになり、正式に発足しました。その教授として私より半年ほど遅れて東京教育大学のほうに赴任されてこられました。そこでは私は鼻が高かったですね。先生より私のほうが半年ほど早く東京教育大学に来ましたなんて得意になっていったことを覚えております。

東京学芸大学時代に博士論文をお書きになられて、そのお手伝いを私がずっとしていたものですから、その内容については私が一番詳しく知っているんですけども、その研究を成し遂げられたあと、東京教育大学の教育相談所に来られまして、そこで始められたのが集団心理療法です。

この集団心理療法というのは実際にはモレノのサイコドラマそのものではないんですが、集団を使ったサイコドラマとっていいと思います。これを集団心理療法というふうに田中熊次郎先生は名をつけておられますが、私も大学院の学生としてそのサイコドラマに参加いたしました。

不登校の子どもは多かったんですけども、当時はスクールフォビア（学校恐怖症）とかスクール・ディナイアー（登校拒否児）というふうに呼んでおりました。そういう子どもを3人ぐらいと、それぞれにつく補助自我というのがありました。当時学校現場から内地留学で来られた先生方と一緒に、私もその中の一人の補助自我になって、ディレクターは田中熊次郎先生で、たった3人の子どもですが、そこには補助自我3人とディレクターとで総勢7人で、その集団心理療法をやった覚えがあります。

ところが、その後この方法をとられている所を私は知らないのです。私の不勉強かもしれませんがね。でも、ここにお持ちしましたけれども、これ実は教育相談研究、

しかも第7集になっているということにあらためて気がついたんですが、第7集というのは実質的には第2集です。1966年に出ています。1963年に教育相談施設が認可になっているはずですので、64年には第1号が出たはずで、ここでもいいますと第6集になるわけです。それが出ています。

実は私の修士論文を載せていただいたので第7集は持っているんですが、残念ながら第6集はもっておりません。しかしそこで田中熊次郎先生はまずソシオメトリーの紹介をしているはずで、そして第7集で集団心理療法の紹介に入っております。約16例の不登校の子についてのケースを逐一紹介しております。

参考になるのではないかと思いますのは、家庭の要因と学校の要因、もう一つは個人的な要因というふうに要因を一応三つ仮定しているんですけども、分類上家庭においてと学校においてと、その中間に治療状況においてというセラピューティック・シチュエーションといいますが、それぞれの場でコミュニケーションが可能かどうかという識別をしまして、アンコミュニケーションとかコミュニケーションかということで、それぞれ分けていきます。

そうするとその三つの場面でコミュニケーションがとれる、気持ちを通じあうというような子でその子を起こしていく。これは一番軽度で割と簡単に治療ができる。しかし、家庭や治療場面でコミュニケーションだけれども、学校でコミュニケーションでないという組み合わせの状況にある子どもは典型的な不登校になる。一方、家庭でコミュニケーションであとの2カ所でアンコミュニケーションであるような場合には、治療場面にまず持ち込んで、そこで信頼関係というコミュニケーションがとれるような訓練が必要であるですね。最後のその三つの場面ですべてアンコミュニケーションであるような子どもの場合は心理療法だけでは間に合わないかもしれないという分類をちゃんとしているんですね。

エバリュエーションにつきましても、最後の評価にしましても、ソシオメトリック・テストを使って、孤立していたのがちゃんとみんなに受け入れられるようになるとか、そういうところまできちっと測定をして評価をして、治療が本当にいったかどうかということを確認していらっやいます。このころにしてはしっかりおやりになっていたんだなということをつくづく感じさせられました。

一方、現代の不登校を見ますとかなり複雑になっている面もあるかなと思えます。あまり小学生と中学生の違いみたいなものは言及していらっやらないんですね。しかし、一方でヤングエイジの重要さというのもちろんと視野を向けておりますし、かなり参考になる理論を打ち出していらっやるということを改めて感じまして、私自身不勉強だったなと思っております。

#### 4. 適応しやすい学級集団

そんなことを経験したものですから私としては学級の大事さ、学級が居心地の良いところであるかどうかということが子どもたちにとっては一番大事なのではないかという観点から、私はもっぱら学級集団の分析に入りました。そんなことを4番目でお話ししようと思っています。

要するに人間というのは人間関係のネットワーク、田中熊次郎先生は登校拒否の問題は人間関係の問題であるというふうに最初からおっしゃっていましたが、私は学級の中の人間関係の部分、学級というフォーマルな場でいいますとインフォーマルな領域になりますけれども、ここで人間関係をいかに居心地のいいものにするか。ただ居心地がいいといいますと誤解を生むんですけれども、人間の成長にとってふさわしい住みよさというものがあるだろう。そういうようなものを学級の中できちんと実現していくことが、不登校にはもちろんのこと、最近でいういじめにとってもいえることで、すべてにわたって人間の成長にとって意義のあることではないかという観点から、学級集団というものに関心をもったわけです。なにせ自分が大学に身を置いてしまったものですから、なかなか実践ができないで今日に至っております。理論的には私はこれが絶対必要なことであると今でも信じております。

#### 5. 人が生きる目的

人の生きる目的ということになりますけれども、最近考えますのは、人という生物がほかの動物たちと違うのは、人間がみんな幸せに生きたいという気持ちを誰もが持っている。人権という言葉が我々とはかくよく使えますけれども、人権とは何なのかということ考えた場合に、やはり一人ひとりが幸せに生きたいという、その幸せに生きる権利じゃないかというふうに思っております。

これは一人で実現できることではありません。自分が本当に幸せになろうとしたら、人にも幸せになってもらわなければならないわけで、そういう意味で社会的な一つの活動がどうしても必要なのではないかと思います。そういう点で人間というのは最も進化した生物ではないかというふうに思っております。

その進化という点で、何が進化しているのかというと、心情なんだろうと思うんですね。あえて言えば、動物たちの間にももちろんそれはあるんでしょうけれども、モレノがいうテレは感情の流れでしょうけれども、テレにおいて人間というのはもっとも進化した動物ではないかというふうに思います。人が集まると人はなんとなく他人を意識する、これが圧力にもなるわけですがけれども、しかし、そ

こでお互いの心がほぐれる、そういうことにもなります。互いの感情を感知し合う、これはおのずからといいますか、自然に人間が集まればそこで生まれてくるものです。それが集団の雰囲気になっていくわけです。感情というものはどちらかという原始的なもののようにいわれまされども、私は人間の感情というものはもっとも動物の中では進化しているのではないかと考えております。

私はアメリカへ行ったときに、バンデューラという学者が翻訳で「自己効力」という本を出しておりました。会ったことのある学者なものですからそれを読ませてもらったんですけども、アメリカ人の考える自己効力というものはもっと孤独な自己効力感なんだなあ。日本人の考える自己効力感というのは何か人のためになったときに感じる自己効力感で、私はあえてそれを社会的自己効力感と、社会的という言葉をつけ加えております。人々が本当に幸せになるためには他人のために役立っているとか、自分が存在していること自体がみんなの邪魔になるものではないんだという意識、それがその人に安心感を与え存在に安定感を与え、そして生きてきてよかったという思いにつながっていくのではないかというふうに思うわけです。

日本は集団主義といわれて緊張の高い社会であるし、そういう社会で我々は暮らしてきています。しかし、どうして緊張しなければならないのか。もっとお互いにリラックスしてお互いのためになることを自然の形で受け入れ、そして自然の形で毎日が暮らせたら、決してこれは緊張にはならず、むしろリラックスできる社会になるんじゃないかなと思っております。

そういう意味では日本はいろんな意味で世界の先進国になります。アメリカへ行ったときに私はつたない英語でしゃべったんですけども、人口密度の上でも未来の地球を示しているし、公害や自然破壊の点でも未来の地球を先取りしているとか、いろいろ挙げました。最近考えますに、これからの地球、イラクでは今まさに戦争が始まるという雰囲気ですけれども、いずれ人類がみんな幸せになるときがくだろうと私は夢見ております。それについても日本はきっと先進国になれるんじゃないかというふうに思っております。

おわりに

時間がまいりました。割とリラックスしてお話ししてしまっただけです。咳も出ないですみました。これも皆さんのおかげかと思えます。私は無事定年を迎えられるのは皆さんのおかげだとひとえに感謝でございます。どうもありがとうございました。今後ともよろしくご支援賜りたいと思えます。失礼いたします。拍手